

特別寄稿

全国大会観戦記

樺島 紳一郎

毎年ふきのとうが芽を出す頃になりますと、妻沼の土手が恋しくなりますが、今年もその季節となりました。学連の最も大きなイベントである全日本学生グライダー競技選手権大会が3月5日から学連妻沼滑空場で開催されました。大会は今年で第28回目、参加チームは我が同志社を含め21チーム、計56名の選手が出場しました。

グライダー競技大会と言っても、あのH-23CイオラスIが学生航空界の最高級機であった頃迄のOBの方々にはピンとこないかも知れませんが、昭和30～40年代迄の競技会は空中操作や、定点着陸、滞空時間等々、言ってみればグライダーで飛べるかどうかを採点するような、世界のレベルから見れば、恐ろしくかけ離れたものでしたが、昨今の競技会は、内容はともかく、3地点(25km又は50km)をいかに早く周回するかの周回コース速度競技となり参加選手は各自のグライダーを十二分に乗りこなしていることが前提となっていますから、見ごたえのあるものになっています。

このように参加機が20機を超えるような競技会は日本では、この学連の大会と、航空協会の日本選手権位のものでしょうか。

×× ×× ××

さて3月6日の当日、日曜日のせい、たいした渋滞もない関越自動車道を東松山インターで出て妻沼の街に入りますと、車の中から早くも競技に飛び立って行くグライダーが見えかくれしてきます。心せくままに車を土手に乗り上げますと、はるか前方に発航待ちのグライダーが15～16機ズラリと並んでおり、なかなかの競技会気分です。

一早速目をこらして母校機アイオンをさがしますと、丁度飛行を終えたばかりなのか最後尾から2番目で次の発航の準備中。緊張した面持ち

で忙しく働き働く選手諸兄におそろおそろ来訪を告げると、なんと「今のところ個人は大野選手がトップ。団体は2位です」と元気の良い返事が返って来たので一同ビックリ。大喜びすると同時に、イヤイヤまだ2日目だから喜ぶのは早いと思いつつ、この元気な声のお陰で今回の観戦は今迄になく楽しく余裕のあるものとなりました。

この日は本当に素晴らしいグライダー日和で、土手に座って観戦をしている者にもサマルルが感じられるような陽気となりました。我々が河原で弁当をひろげる頃には、遂に参加機21機が全機滞空、地上には1機もいなくなる状態がしばらく続き、目の前に観戦する対象が全く無いにもかかわらず、競技会のムードは最高に盛り上ると言う、一寸普通のスポーツでは考えられない雰囲気が味わえました。マラソンランナーが全部走り去った競技場とも又違ったムードです。

このようなコンディションが続く中、12時を回った頃から周回を達成してゴールする機が増えだし、



特に2チーム、2機ずつ参加している早慶両校のゴールが目立ちます。競技は1人1日何回飛んでもかまいませんから、着陸した機は又どンドン発航します。

さて、我らがアイオーンはいづこに……。同機には今日2回目の森川選手が塔乗し、発航以来すでに1時間以上が過ぎています。もうゴールしても良い時間です。最終ポイントの太田上空に目をこらしますが、サッパリ機影がつかめません。そうこうする内にスタンバイの山口選手から「機影確認!」の声あり。同選手の指さす方向を見ますと確かに第1ポイントの昭和橋と太田の中間よりかなり太田寄りで旋回を続けている機体があります。双眼鏡で見るとやはりアイオーンですが高度がみるみる下っています。機影はまだケシ粒のようにしか見えないのに高度は100mを切っているように見えます。幸か不幸か、アイオーンが旋回している地点と、ランウェイの間には利根川があります。万が一の場合でも広い河原があるから大丈夫、と思いつつも一同ムズムズしながら見ていますと、一瞬機影が土手にかくれるように見えました。大野、山口両選手が川に向かってかけ出しました。

×× ×× ××

それから同機が無事に着陸する迄は一瞬のことでした。この程度のことは最近の競技会ではさして珍らしいことでもないのですが、あの玉水の河原をバットの如くはいずり回っていた世代のOBにとっては、森川選手の落付いた操縦と、アイオーンの性能の良さにはただただ驚きでした。

結局、この飛行で森川選手は周回は果したが、ゴール通過の際の高度不足のためゴールは認められなかったとのこと。地図上で見れば、何と言う

こともない小さな三角形も選手諸君にとっては仲々大変なようでした。

森川選手の後を受けて大野選手が発航。1時間程で帰投、昨日に続いて見事2度目のゴールを果たしました。そして山口選手が当日初の発航をした午後3時頃、これから1週間にわたり繰り広げられる大会での3選手の健闘を祈りつつ妻沼をあとにしました。

一追記一

後日大会の成績は、個人は大野選手が7位、団体は残念ながら12位にとどまったと聞きました。この結果を聞いて感じたことは、航空部はやはり体育会です。競技会に参加するからには勝たねばなりません。我が同志社クルーの技量も他校にひけをとらぬようです。機材も今が50年余の歴史の中で一番充実しているでしょう。あとは土地感のある地元選手にどう互^てして行くか、又少しでも好得点を稼ぐチャンスを増やすために選手の層を厚くし、2チーム2機を参加させることでしよう。そのためには翔友会もそれなりに役割を果せるかも知れませんが、空に舞い上って戦うのは現役諸兄です、今後の研鑽に期待したいものです。

(昭和40年卒)

出場選手	個人得点	順位	団体得点	順位
森川 泰(4年)	300			
大野剛嗣(3年)	3,385	7位	3,685	12位
山口智啓(3年)	0			